



城

調整課審査推進室 深草 祐一

第九回 小田原城

～難攻不落の総構～

現在復興天守が建つ石垣造りの小田原城は江戸時代のもので、江戸へ通じる箱根口を守る重要な城でした。しかし、小田原市内の随所に三鱗の紋が見られるように、小田原城といえば戦国大名後北条氏の本拠。今回は、上杉謙信、武田信玄の軍勢をも退け、最後まで力攻めでは落ちなかった天下の堅城についてご紹介します。

北条早雲の小田原城奪取

小田原城は大森氏により現在の本丸の北方の八幡山(現小田原高校付近)に築かれたのが最初とされています。それを、駿河の今川氏の下で韮山から伊豆へ勢力を伸長させていた伊勢新九郎(死後、北条早雲と呼ばれる。)が奪いました。「北条記」によれば、逃げた鹿を追い戻すと偽って人夫に偽装した精鋭を北方の丘陵に送り込み、夜になってから牛の角に松明を付けて大軍に見せかける「火牛の計」を用いて、わずかな兵で落とすといひます。

その後早雲は三浦半島方面へと勢力を伸ばしていきますが、小田原城へ本拠を移すのは息子氏綱の代になってからでした。そしてその頃から、過去鎌倉幕府執権として権勢を誇った北条氏の姓を名乗るようになりました。更にその子氏康の代になると河越夜戦の大勝を経て関東管領上杉氏を追い、関東の覇者へと成長していきます。この頃には城域を八幡山の南方、現在の本丸・二の丸付近まで拡張していたようです。

長尾景虎(上杉謙信)の来襲

北条氏康に追われた関東管領・山内上杉憲政を迎

え入れた越後の長尾景虎は、関東諸勢に参陣を呼びかけながら大遠征を敢行します。ついに10万にも膨れ上がった景虎の軍勢に対し、北条氏康は慎重に情勢を見定めて籠城策をとりました。寄せ手は猛攻をかけ、一時は二の丸まで攻め寄せましたが、拡張した小田原城の守りは堅く、それ以上進むことはできませんでした。一方で北条勢は少人数での夜襲を繰り返すなど嫌がらせを続けたため、寄せ集めの陣中には厭戦気分が広がり始めます。景虎としては、旧来の権威をないがしろにした後北条氏を関東の諸豪族の前で潰して見せたかっと思われそうですが、もはや益なしと判断して陣を引き払い、鎌倉で関東管領就任式を華々しく行った後、越後へ引き上げたのでした。ちなみに景虎はこの後すぐに川中島で武田と戦っており、いつまでも小田原に居るわけにはいかなかったようです。見事に情勢を読んだ氏康はさすがというべきでしょう。

武田信玄の遠征

今川義元が桶狭間で織田信長に討たれた後、武田信玄は甲相駿三国同盟を破棄して駿河へ侵攻し始めます。これに怒った北条氏康は駿河に派兵。激しい戦さとなりました。そこで、信玄は2万の軍勢を率いて碓氷峠を越え関東へ乱入しました。北条一門衆の鉢形城(氏邦)、澁山城(氏照)を攻撃し、その後相模川沿いに南下して小田原城を囲みました。しかしこの時も氏康は徹底して籠城策をとり、堅城小田原城は武田勢を寄せ付けませんでした。そして武田勢はわずか3日で撤退を開始。この機を待っていた氏康は追い討ちをか

けるべく、自らも出陣するとともに子の氏照、氏邦を武田勢の帰路の三増峠^{みませとうげ}に向かわせました。しかし待ち伏せしたはずの北条勢は山岳戦に慣れた武田勢の側面攻撃に遭って壊走。挟撃すべく進軍中だった氏康はこの報を聞くと速やかに小田原城へ引き上げたのでした。

野戦には敗れたものの、この時も小田原城はその堅城ぶりを示しました。ただ、この時信玄には本気で小田原城を落とす気はなく、関東を脅かして北条を駿河から引かせるのが目的だったと言われます。実際、その後武田と北条は再度和議を結び、武田は駿河攻略を進め、やがて信長を討つべく上洛軍を起すこととなります。

豊臣秀吉による空前の大攻城戦

武田氏滅亡後、豊臣秀吉は旧武田家臣の真田昌幸^{さなだまさゆき}の求めに応じ、武田の遺領を引き継いだ徳川と北条との間で問題となっていた真田領の帰属について裁定を下しました。しかし、北条氏直^{うじなお}はこれを無視して真田の城を攻め取ってしまいます。秀吉はこれを口実として北条討伐を発令。総勢20万を超える諸大名の軍勢が一斉に関東へ進軍し、各地の支城をひと揉みにする圧倒的な勢いで小田原城へ殺到しました。しかし、この時までに小田原城は秀吉の来襲を予測して更に大規模な拡張工事を行っており、周囲約9kmにわたって城下町や田畑までも取り囲んだ総構^{そうがまえ}と呼ばれる外郭を有する大城郭となっていました。総構は大坂城にも造られた非常に堅固な構えで、それを6万もの城兵が守備しており、さすがに単純な力攻めや兵糧攻めで落とせるも



総構外郭の大堀切跡

のではありませんでした。そこで秀吉は陸のみならず海からも完全包囲し、底なしの財力を使って小田原城を見下ろす山の上に巨大な石垣の城を築いて威圧しました。築城後に周囲の木を切り倒し一夜にして巨城が完成したように見せかけたという伝承から「石垣山一夜城」と呼ばれるこの城で、秀吉は茶会を開いたり、側室の淀殿^{よどの}を呼び寄せたりと、小田原方へ余裕を見せつけました。そのうちに小田原城内では家臣団の疑心暗鬼^{うじまさ うじなお}が起り、北条氏政、氏直父子はついに降伏・開城したのでした。このことから、結論の出ない話し合いを延々行うことを「小田原評定^{おだわらひょうじょう}」と言いますが、しかしこの時、英明で知られる北条氏照^{うじてる}（氏政の弟）が徳川家康や、織田信雄、伊達政宗らの寝返りを画策していたという説もあり、難攻不落の小田原城を前にして秀吉も全く余裕でいた訳ではなかったようです。

現在に残る遺構

天守の真横を東海道線が、そして八幡山古郭の下を新幹線のトンネルが通るなど、江戸期の本丸・二の丸が公園化されている他はすっかり都市化が進み、後北条氏時代の土の遺構はほとんど残っていません。数年前には八幡山古郭の前を覆うようにマンションが建つところだったそうです（結局市が買い取って決着したとか。）。しかし、小田原城の歴史的価値の高さから、一方では発掘や史跡保存活動も活発で、八幡山の北方に一部残る総構の外堀・土塁の跡は国指定史跡としてしっかり保存されており、その堀の深さ、土塁の高さに往時の難攻不落の構えの一端を目の当たりにすることができます。



石垣山一夜城から小田原城を望む